

## 星になった宮沢賢治(前編)

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘

童話作家、詩人そしてサイエンティストとしてよく知られている宮沢賢治(1896—1933)(以下、賢治)の作品を楽しんでおられる人は多いのではないのでしょうか？

今年2023年は、賢治が亡くなってから90年の年にあたり、各地でいろいろなイベントが開かれ、映画も上映されたりしています。

### 『よだかの星』

賢治の作品のひとつ、童話『よだかの星』(図1)はご存知ですか。

よだかは醜い鳥で、ほかの鳥から嫌われています。強い鷹は「俺の名前を勝手に使うな、名前を返せ！」とおどします。誰もたよりにできないよだかは、自分の運命を悲しく思いつめ、どこか遠くへ行ってしまおうとします。ぐんぐんと空に向かって飛び、羽が凍りつくほど高くまで来たとき、よだかは力尽きてしまいます。気がつくと、よだかは自分のからだが青く美しい光になって、静かに燃えているのを見ます。よだかは星となって燃え続け、今でもまだ燃えているのです。最後の悲しくて美しい場面を見てみましょう。



図1.『よだかの星』

それからしばらくたってよだかははっきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいま<sup>りん</sup>燐の火のような青い美しい光になって、しずかに燃えてみるのを見ました。

すぐとなりは、カシオペア座でした。天の川の青じろいひかりが、すぐうしろになってゐました。

そしてよだかの星は燃えつづけました。いつまでもいつまでも燃えつづけました。

今でもまだ燃えてゐます。

この童話では、鳥が星になりました。

### 『銀河鉄道の夜』

もう一つの童話『銀河鉄道の夜』(図2)を見てみましょう。ジョバンニとカムパネルラの二人の少年が天の川に沿って宇宙を旅する物語です。この中で、船が難破しておぼれ、亡くなったばかりの姉弟が銀河鉄道に乗り込んでくる場面があります。二人が、別の世界で生きるために銀河鉄道に乗り込んでしばらくたった時、列車の窓の外

に、“ルビーよりも赤くすきとおりリチウムよりもつくしく酔ったような火が燃えている”のが見えてきます。姉が語る次のような場面が描かれています。

「…どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなしく命をすてずどうかこの次にはまことのみんなの幸のために私のからだをおつかひ下さい。って云ったといふの。そしたらいつか<sup>さそり</sup>蝸はじぶんのからだがまっ赤なうつくしい火になって燃えてよのやみを照らしてゐるのを見たって。いまでも燃えてるってお父さん<sup>おっしや</sup>仰ったわ。ほんとうにあの火それだわ。」

「そうだ。見たまへ。そこの三角標はちやうどさそりの形にならんでいるよ。」

ジョバンニはまったくその大きな火の向ふに三つの三角標がちやうどさそりの腕のやうにこっちに五つの三角標がさそりの尾やかぎのやうにならんでゐるのを見ました。そしてほんたうにそのまっ赤なうつくしいさそりの火は音なくあかるくあかるく燃えたのです。

列車の窓から見たさそり座の赤い輝きは、死んださそりの姿だったのです。

この童話では、さそりが星座になりました。賢治は、生き物の尊い命を星や星座によみがえらせたのです。

(続く)

[参考]

- 1) 『宮沢賢治全集 1～10』 ちくま文庫 (1986—1995)
- 2) 宮沢賢治 作・中村道雄 絵 『よだかの星』 偕成社 (1987)
- 3) 宮沢賢治 絵・司修 『絵本 銀河鉄道の夜』 偕成社 (2014)

桜井 弘

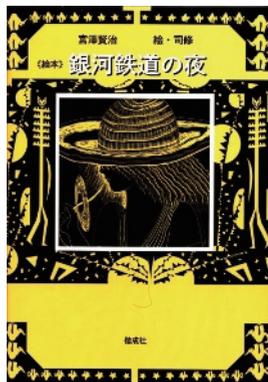


図2.『銀河鉄道の夜』

KONICA MINOLTA

私たちは「宇宙」を作っている会社です。

— プラネタリウム生誕100周年 —

最新の光学・デジタル プラネタリウム機器の開発・製造から、独自の番組企画・制作・運営ノウハウに至るまで、プラネタリウムという“スペース”の可能性を追求し続けてまいります。

コニカミノルタ プラネタリウム株式会社

本社・東京事業所 〒170-8630 東京都豊島区東池袋3-1-3 TEL.(03)5985-1711  
 大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 TEL.(06)6110-0570  
 東海事業所 〒442-8558 愛知県豊川市金屋西町1-8 TEL.(0533)89-3570  
 URL: <http://www.konicaminolta.jp/planetarium/>

画像：大阪市立科学館